＜書評＞　（『むくげ通信』245 号 2011 年 3 月号 21～22 頁）

日本コリア協会･愛媛編著『植民地朝鮮と愛媛の人びと』

飛田雄一

四六判、３９６ページ、１６８０円（税込み）、愛媛新聞社発行。問合せ先：日本コリア協会・愛媛　TEL089-945-0026 FAX945-0040(愛媛法律事務所内)

本書は、日本コリア協会･愛媛の編集によるものだ。第１部では植民地朝鮮と愛媛の関わりが、第２部ではその時代を生きた愛媛ゆかりの人々の実像が、第３部には丁寧で貴重な年表が付されている。

同会は、2001 年 6 月、愛媛県でおきた「つくる会」の歴史・公民教科書の採択問題以降、学習会を継続的に開催してきたが本書はその成果である。

むくげの会は、2009 年の新春合宿で愛媛県を訪問したが、そのとき別子銅山を案内してくださったのが本書出版の中心となった尾上守さんと松原満紀さんだ。容易周到に、限られた時間のなかで充分な案内・解説をしてくださった。(『むくげ通信』233 号 2009.3 参照）また、本通信 163 号 1997.7 では飛田がおふたりの『住友別子銅山で＜朴順童＞が死んだ』の書評を掲載している。

内容は以下のとおりである。

●

＜第 1 部 植民地朝鮮と愛媛＞

- 海南新聞に見る東学農民戦争 1―後備歩兵第十九大隊の出征 会員 尾上守
- 1894 年日本後備歩兵第十九大隊中路軍の鎮圧策と東学農民軍の対応 申榮祐
- 海南新聞に見る東学農民戦争 2―後備歩兵第十九大隊の帰郷 尾上守
- 全羅南道・莞島に設営された移住漁村―伊予村・カマクミ 伊地知紀子
- 民衆主体の朝鮮進出と内泊漁民の三千浦での移住漁村経営 金秀姫
- 住友別子銅山へ戦時労働動員された朝鮮人―北海道・鴻之舞から移された人たちを中心に　松原満紀

＜第 2 部 朝鮮に生きた愛媛の人びと＞

- ＜三・一独立運動期＞の乗松雅休の朝鮮での布教活動 李元淳
- 韓国鉄道と大倉粂馬 松原満紀
- 古谷久綱と伊藤博文　松原満紀
- 三・一独立運動と永井叔　松原満紀
- 朝鮮人のこころによりそった詩人山辺珉太郎 松原満紀
- 光州学生独立運動と岩城錦子 松原満紀
- 植民地教育と戦った日本人教師 上甲米太郎　澄田恭一

＜第 3 部 年表＞

- 愛媛の朝鮮人と朝鮮の愛媛県人―明治から昭和 20 年まで　松原満紀

・ ●

ローカルな「愛媛」をテーマに、このような本が出版されたことに大きな意義があると思う。尾上さんの「海南新聞に見る東学農民戦争」は、愛媛の後備歩兵第十九大隊が鎮圧に派遣されたことを丹念に調査している。海南新聞の論調が当初の同情的なものから好戦的なものに変化していく様子についても描かれている。指導者の全琫準は「頗る才胆略に富み中々侮るべからざる英雄なり」（1894.5.27）とし、また農民軍についても「地方住民の米糧を奪掠すること決してこれなく、必要の食料品を購入するにも立（たちどころ）に不足な代金を支払ひ」（同日）と好意的に報じている。

また妻が亡くなったのち一人息子を育てていた貧

しい農民が後備歩兵に徴兵され、子どもをおいては従軍できないと懇願するが許されず、やむなくその子を殺して従軍したという悲しい話も紹介されている。（1984.8.9）

しかしその後、「現今尚韓国の累を為すものは東学党の潜伏なり、彼らの乱民、決して大事を企て得るものにあらずと雖も、彼ら若しじん滅せずして暴動せば、自国の独立を危くするものなり」（1894.10.11）というような報道がなされるようになるのである。

海南新聞をとおして愛媛と東学農民戦争との関係をこのように描くことができるのかと感心するとともに、このような手法で地域の歴史と朝鮮植民地支配の関係をとらえることはとても大切な視点だと思う。

「1894 年日本後備歩兵第十九大隊中路軍の鎮圧策と東学農民軍の対応」（申榮祐）では、おもに朝鮮半島の状況が記されているが、旅順当時の旅順虐殺について、「（1894 年）10 月 25 日（陽暦 11 月 22 日）、旅順市街に入ってきた日本軍は 4 日の間で住民 2 万余名を虐殺した」と明確に書かれている。私は、2004 年 8 月、神戸･南京をむすぶ会のフィールドワークで旅順を訪ね、そこに残されている「万忠墓」にも立ち寄った。当時神戸にいたラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が「神戸クロニクル」1894 年 12 月 7 日付）紙上に「日本軍の行為はなんの言い訳も受け入れられないであろう。（中略）婦人、子供や非戦闘員に対する不必要な残虐行為については、その行為を犯した者たちの行動に責任を負う将校たちを厳格に罰するべきである」と批判していた事実である。東学農民戦争の道を訪ねるツアーも学生センターで実施さいたり（1999 年）、信長正義さんが関連書書籍を翻訳、出版したり、ますます身近な「歴史」となっている。

●

松原満紀「住友別子銅山へ戦時労働動員された朝鮮人―北海道・鴻之舞から移された人たちを中心に」では、先の『＜朴順童＞が死んだ』をもとにその後見つかった資料を補足しながら鴻之舞鉱山から別子鉱山に移送された朝鮮人を立体的に描いている。北海道開拓記念館所蔵の「別子行半島人労務者名簿」を手がかりに韓国での調査も行っている。私は神戸港の中国人強制連行について調査したときに神戸港が米軍の機雷により封鎖されて以降、福井県敦賀、石川県七尾、北海道函館に再連行された中国人のことも調べたが、本書を読んで日本国内での強制連行の実態等についてもっと立体的に調査することが必要であったと反省した。

第１部の伊地知紀子さん、金秀姫さんの論考は、植民地の朝鮮に日本の漁民が渡っていって村を形成したことが描かれている。むくげの会のことしの合宿は浦項を訪問したが（本誌参照）、浦項の日本人家屋のことを思い起こしながら読んだ。また日本人は「三千浦」にも進出したが、以前神戸電鉄で犠牲となった朝鮮人の遺族を固城に訪ねたとき、同行してくれた林オンギュさんが「三千浦ポリンダ」という言葉を教えてくれた。「目的地に着く前に寄り道する」ことだという。そのときは三千浦に寄り道することができなかったが・・・。（『むくげ通信』144 号 1994.5 参照）

第２部の「人びと」は、愛媛にこんな人がいたのかとびっくりした。それも朝鮮民衆に心を寄せた日本人である。乗松雅休、上甲米太郎のことはかろうじて知っているがその他の「人びと」のことは知らなかった。

●

永井叔（よし）は、1896 年松山市に生まれたが中学 4 年のとき受洗し関西学院神学部に進学する（兄の反対で中退）。青山学院、同志社も入学・退校するが、1917 年バイオリンを弾いて「武器の否定、徹底平和」を説く「門付け」を始める。1919 年の三・一運動時にソウルで軍務についていたが「暴動鎮圧」に反対して禁固刑を受ける。永井は後日この抵抗が不徹底であったと反省したという。梶村秀樹は「私の知る限り、この時点で自分の存在を賭けて植民地支配を否定し三・一運動の心を理解しようとしたのは永井叔ただひとりである」と書いている。今回の本書の論考を契機にさらに永井叔が研究されることを願っている。山部珉太郎、岩城錦子の話も感動的である。岩城錦子は本籍が愛媛県宇和島市で、父は日本人、母は朝鮮人。光州学生運動時「少女会事件」で検挙され治安維持法違反で懲役１年、執行猶予 5 年の判決を受け、検挙から 9 か月後に釈放されている、むくげの会は 1999 年に共同研究のレポートとして『日帝下朝鮮・光州学生運動研究』（むくげ叢書②、A5 判、1500 円）を出版したこともある。読み返してみたがこの少女会事件の記述はなかった。

愛媛の地で出版されて新たな成果である本書の一読をお勧めする。